琉游舎

アトリエ琉游舎だより 171号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/
琉游舎for healing https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3

2024年1月31日発行

寒のうちの雨は親の乳房
寒雨降ったら麦俵造っておけ

●大寒に入った翌日にまとまった雨が降りました。前日までの予報は大雪もあったのですが夜中から降り始めた雨は、日曜日も夕方まで降り続きました。雪にならずに残念がったのは子供と犬だけかも知れません。大人は歩く人も車を運転する人も道が凍ることが心配です。
●寒の期間に降る雨は、豊作の予兆と考えられてきました。上記の言い伝えはいずれもそのことを表しています。寒の内の雨は赤ちゃんに与えるお乳のようなもの、寒雨が降ったら今年は豊作だから今から麦俵を用意しておきなさいと言うことでしょう。冬の太平洋側はこの時期空気が乾燥して、雨がほとんど降りません。寒の雨は「万物を潤し生気を与える雨」だと考えられて有り難がられているからこんな言い伝えがあるのだと思われます。
●草は枯れ、木は葉を落としたこの時期も、目をこらすと草木の芽や花のつぼみが顔を出し始めています。冬は生き物の冬眠期間と言うよりは、成長のための準備期間と言えるでしょう。寒の時期にどれだけ根をしっかり伸ばせたかが、のちの成長具合を左右すると言うことを、古来から人々は経験知としてとして伝えてきたのです。寒の時期の恵みの雨でしっかり根を伸ばせば、その後の豊作は約束されたものと考えたに違いありません。
●冬は春の成長への準備期間と考えられているのでしょうが、それにしては最近は冬眠するはずの熊が雪山をうろついていたり、大寒なのにもう杉花粉が飛んでいたりと、季節の先取りが甚だしいようです。それでももうすぐ立春、春になります。私自身、寒雨の期間にどれだけ春の準備をしているのか心許ないのですが、大寒の雨にも春を予感し、活動の季節への心構えを言葉に残し、春の訪れを心待ちにさせてくれる先人の言葉に帰命します。南無。

2月・3月スケジュール

月	火	水	木	金	土	日
			1 映画会 お休み	2	3	4
5	6	7	8 映画会 お休み	9	10	11
12	13 読書会 13時半から	14	15 映画会 13時半から	16	17	18
19	20 読書会 13時半から	21	22 映画会 13時半から	23	24	25
26	27	28	29 映画会 お休み	3月1日	2	3 写経会 13時半から

読書会
2月13日
2月20日
（火）13時半

写経会
3月3日（日）
13時半から

映画会
2月15・22日
（木）13時半

狂言綺語…愛

琉游舎
Ryu Yu Sha
Place to pray, play and progress

秋に蒔いた大根は例年は12月に収穫して、食べきれない分は穴を掘って土の中に生け込んで保存をしてきました。こうすれば3月の半ば頃までは美味しく食べることができます。ところが今年は長引く猛暑が収まるのを待って種を蒔いたため成長が遅れ、いつもの収穫期になってもまだ小ぶりのままでした。また今年は暖かい冬なのでそのまま植えっぱなしにして様子を見ていたら、とうとう大寒の季節を大根は畑で過ごすことになってしまいました。この時期になると土の上に出た大根の首は凍ってしまいますが、今年は身も活き活きとしています。草が枯れる頃は鳥が青物を求めて野菜の葉を食べに来るのですが、その被害にも遭わず、葉はいまだに食べられる状態です。今年のような細かい違いはあっても、季節は移ってみればいつもの通りの季節である、ということが生き物のDNAに刻み込まれているはずです。小さな変化に臨機応変に対応しつつ自然の移ろいを信じて準備を怠らないこと、それがありのままに自然と生きることなのでしょう。

今年は年初から自然災害や飛行機事故、政治不祥事などが次々に起こりました。侵略戦争は終結する兆候も見せず、民主主義と正義を標榜する国では、それをあざ笑う言動を取り続ける人物が支配者にならんばかりの勢いです。科学的、理性的に見ればこれらの出来事は個別の理由があり、全く独立した事象であるに違いありません。しかし人々の心情の中では何か今年は騒々しい、良くないことが連鎖して起こるのではないか、不幸で不安定な時代、例えば太平洋戦争直前のような時代がまたやってくるのではないかと不安を覚えている人もいるのではないでしょうか。自然災害と政治不信、民衆の生活困難はいつの時代でも繰り返し起こってきました。平和で戦争のない時代は一世紀も続いたことがあったでしょうか。日本で大地震がなかった時代は百年も続いたことがあったでしょうか。季節が規則正しく繰り返されるように、大災害も戦争も一定の周期で何度も繰り返されてきていたのです。人も自然の移ろいの中で生きているのですから、自然の要請に従って人の行動も規定されてきたはずです。「歴史は繰り返す」という言葉が人間の過去に学ばない態度や愚かさによって語られるだけではなく、宇宙の法則、自然の摂理によって必然的に導かれる人間の行為と考えるべきではないでしょうか。その法則の中で生かされていた人間が、人間にできる微調整で不幸に抵抗しあるいは順応しようとした結果が、科学であり哲学であり宗教だったのでしょう。そしてその微調整を根本的な解決策であると思い込んでしまうことが「歴史が繰り返す」ことの原因ではないでしょうか。

仏教は苦からの解放を希求する宗教です。それは四つの教え(四法印）によって成り立っています。「諸行無常（すべての物事は常ならざるもの）」「諸法無我（すべての物事は我れならざるもの）」「涅槃寂静（涅槃は安らぎの境地）」「一切皆苦（この世のすべては苦しみである）」。世界をこの四法印によって在ると観ることが仏教の全てです。誤解を恐れずに言えばその他のものは教えの枝葉、それが言い過ぎであれば「四法印」と世界を観ること、つまり「ありのままに観る」ことを獲得するための道の歩き方（仏道）を示したものです。念仏も題目も禅も仏道を歩く方法を示したものにすぎません。私たちの願いは「苦」から解放されることですから、その実現のために自分に合った方法を選び独自の道を歩めばよいだけなのです。

仏教が希求する「苦」からの解放を妨げる大きな要因に「愛」があります。キリスト教的な愛は「神があらゆるものを慈しむ。またそのような精神で、自分以外のものをかけがえのないものと思う。」という説明がされるようですが、私がここで言う「愛」は人が自分や自分以外を愛でることとして語ります。キリスト教的な「神の愛」とは全く異なるのですが、表層面では類似する「仏の慈愛」についてと「愛」とは厳密に区別しなければなりません。さて「愛」は家族愛、人類愛、恋愛、郷土愛、愛国というような文脈で語られ、人が持つべき賞賛される感情と思われています。しかし果たしてそうでしょうか。人は一旦手に入れた愛を容易に手放すことはできないはずです。つまりこれらの愛は容易に「執着」と結びついて「愛着」となります。そしてこれが「苦」の原因となるのです。世界をありのままに観る（諸行無常）とき「愛」は普遍でも絶対でもありません。そもそも諸法無我である私には愛という属性は存在しえないはずなのに、無いもの(無常）を固定的な存在として在ると思い込む私がそこにはいるのです。実在すると思ったものを失うことは苦痛です。失わないようにあらゆる手立てを尽くすとことが執着です。しかし「愛」は自然や権力や家族や見知らぬ誰かなどの他者に容易に奪われてしまうものでもあります。「愛」を奪われないために防御や攻撃が必要になります。「愛」を失なうこと、失わないようにあらゆる手立てを尽くすこと、失うことを恐れること、いずれも「苦」です。「愛」を持つことは同時に「苦」を持つことでもあるのです。愛苦不二です。

「愛」は煩悩です。しかし人である限り「愛」を持つことは生きている証しです。人をして人たらしめているものが煩悩だからです。煩悩があるから科学があり哲学があり文化があるのです。「寂静」を得るためには「涅槃（身体の死）」に入らなければならないのならば、身体が生きている限り煩悩から逃れることはできません。人が生きていくための摂理が煩悩なのです。その煩悩を働かせる原動力のひとつが「愛」といってもよいでしょう。自然災害が自然の摂理により起こるものであるならば、それに人間の摂理(愛）は抵抗できるでしょうか。私たちは大きな災害が起こるたびに「愛」の様々な形を見せられます。自己愛、家族愛、土地や所有物や生業への愛着、そしてその「愛」に伴う様々な「苦」も見ることになります。その時私は「苦」からの解放が安らぎの道なのだからその「愛」を放棄しなさい、「愛」に執着する限りあなたは「苦」から逃れることはできません。と言うことはできるでしょうか。仏教はそれを言ったら仏教ではなくなるでしょう。その矛盾(不二)を生き続けることが仏の道だと信じて私は日々を生きていきたいと思います。